様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　４月３０日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2008
課題番号：19530618
研究課題名（和文）　思春期の子育て支援プログラムの開発

研究課題名（英文）　Development of psychoeducational program for supporting parents of teenagers

研究代表者
平石　賢二　(HIRAISHI KENJI)
名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授
研究者番号：80228767

研究成果の概要：
本研究においては，大別して２つの研究を行った。研究Ｉでは中学生とその保護者を対象にして平成18年7月から年1回実施している縦断調査を平成19年,平成20年と継続して行い，3 回の調査を経て，思春期の養育態度の特徴について検討した。研究Ⅱでは，中学生の子どもをもつ保護者を対象にして，子どもとの関係性に関する自己理解を深めることを目的とした子育て支援プログラムを開発・実施し，その効果と課題について検討を行った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,800,000	540,000	2,340,000
２００８年度	1,600,000	480,000	2,080,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：臨床心理学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：思春期，子育て支援，親子関係，養育態度，地域援助，心理教育的プログラム，縦断調査

１．研究開始当初の背景
思春期は心身の成長が著しく，情緒的，行動的問題が生じやすい時期であるとみなされている。また，大人に対する態度が変化し，特に親子関係においては，古くから反抗期と呼ばれるように保護者にとってかかわりにくい年齢としてみなされている。従来の思春期の親子関係に関する研究は，子どもの側の視点での研究が多かったが，近年，欧米においてはこういった思春期の難しさを親の側の視点から研究する動きが見られるようになっている。また，思春期の子育て支援に関する実践研究も始まってきている。しかし，我が国における子育て支援に関する研究と実践は，乳幼児のものに集中している傾向があり，思春期の子育ての難しさに関する研究や，思春期の子育て支援に関する研究が殆ど行われていない。
本研究においては，そのような状況をふまえ，思春期の子育て支援プログラムの開発とその効果の検証を試みることにした。

２．研究の目的
本研究では，思春期の子育て支援プログラ

ムを開発するために，思春期の子育てに関する基礎的な研究と，その基礎的な研究知見を応用して開発した子育て支援プログラムの実践的な研究を行うことを目的とした。各々の目的は以下の通りである。

(1) 研究Ⅰ

著者らによる先行研究の結果，思春期の子育て態度の重要な側面として，子どもの成長に対する認知・感情，養育スキルなどが明らかにされてきた。研究Ⅰでは，それらの子育て態度の側面が，個人の中でどの程度安定したものであるのか，変化のパターンには個人差が見いだせるのかを縦断研究によって明らかにすることを第一の目的とした。

また，第二の目的は，子育て態度が子どもに与える影響に関するプロセスモデルを検討することである。従来の研究においては，保護者の報告する養育態度は，子どもの報告による適応指標との相関が低いか，殆ど見られないことが指摘されている。本研究においては，子どもに対する態度が与える影響として，相互信頼感に着目し，子育て態度が相互信頼感を媒介して，子どもの適応に影響を与えるのではないかという仮説モデルを検証することにした。

(2)研究Ⅱ

子育て支援では，保護者のエンパワーメントや情緒的サポート，情報的サポートなどが目標となることが多いが，本研究においては，思春期年代である中学生の子どもをもつ保護者が，子どもに対する自分自身の考えや気持ち，態度などを振り返り，様々な気づきを通して，自己理解を深めることができるよう支援することを目標とした。具体的には著者らによる先行研究や，研究Ⅰの成果によって開発された，思春期の子育て態度を測定する下記の３つの尺度を使用して，自己理解を深めることを目標とする研修プログラムを企画・実施した。また，プログラムの有効性と課題を検討することも目的とした。

３．研究の方法

(1)研究Ⅰ

①調査対象および実施方法　第１回目の調査は，本助成研究の開始年度の前年度に実施され，東海地区の公立中学校９校および私立中学校１校を対象にして，調査依頼を行い，中学１年生から３年生までの生徒およびその保護者に対して質問紙調査が実施された。調査用紙への回答は調査の趣旨に賛同してくれた方のみである。第２回と第３回目は，調査協力の得られた方に対して郵送調査で行った。最終的に３回すべての調査に回答してくれたのは179組の親子であった。

②調査実施時期　平成18年６月から平成20年10月まで，おおよそ１年間隔で３回実施した。

③測定用具　保護者に対しては，自尊感情尺度（山本・松井・山成,1982），子どもの成長に対する認知・感情尺度(平石,2007)，思春期の子育て態度尺度（平石,2007），養育スキル尺度（渡邉・平石,2007），相互信頼感尺度（渡邉・平石・信太,印刷中）（第２回目，第３回目のみ）を実施した。子ども（生徒）に対しては，自尊感情尺度(山本・松井・山成,1982)，社会的コンピテンス尺度(桜井,1983)，不適応感尺度（水野・石隈・田村,2003），子どもの認知した親の子育て態度尺度（平石,2007），相互信頼感尺度（渡邉・平石・信太,印刷中）（第２回目，第３回目のみ）を実施した。

(2)研究Ⅱ

平成21年２月に東海地区の３つの公立中学校を通じて，保護者を対象に子育て支援研修会の案内を配布し，３回実施し合計40名の参加を得た。

研修会の所要時間は２時間。自己理解を深めるための道具として，研究Ⅰで使用された「子どもの成長に対する認知・感情（肯定的認知・感情と否定的認知・感情の２側面)」，「思春期の子育て態度（不安定な態度，威厳ある態度，適切な心理的境界，主体性の尊重の４側面)」，「養育スキル（道徳性スキル，自尊心スキル，理解・関心スキル）の３側面」の３種類の子育て態度尺度を含み，回答後に自己採点ができるよう作成された心理テストPATを使用した。尺度項目の例は別表を参照のこと。

また，PAT実施後は解説，参加者同士の話し合い，質疑応答，事後アンケートを実施した。事後アンケートの項目は,「知識の獲得」，「自己理解」，「肯定的な感情と動機づけ」，「否定的な感情」の４つの内容に分類される質問17項目（5段階評定で１点から５点までを配点），各心理テストの印象度を測定するための質問９項目（5段階評定で１点から５点までを配点），自由記述の質問１項目を含んでいる。

４．研究成果

(1)研究Ⅰ

調査回答者の大半は母親であり，母親以外の者は非常に少なかったため，以下の分析は母親のデータのみを使用した。

①思春期の子育て態度の安定性

子育て態度の安定性については，子どもの成長に対する認知・感情と，養育スキルの観点から分析を行った。

縦断調査によって３時点で測定した変数間の相関係数を算出したところ，子どもの成長に対する肯定的認知・感情は，.43～.84，否定的認知・感情は，.52～.82の範囲の数値が

得られ，中程度から高い程度の有意な相関関係が窺われた。また，養育スキルにおいては，養育スキル全体で.64～.65，道徳性スキルが.61～.70，自尊心スキルが.60～.69，理解関心スキルが.58～.66 とやはり中程度以上の相関関係が窺われた。これらの時点間の相関係数は，対象となる子どもの学年によっても若干違いが認められ，学年が上がると保護者の子どもに対する態度はより安定する可能性も窺われた。

続いて，尺度得点の時点間の比較を分散分析によって行った。肯定的認知・感情尺度と否定的認知・感情尺度得点について，2 要因分散分析（反復要因×学年）を行った結果，肯定的認知・感情尺度得点では，反復要因（F〔2,352〕=9.68,p<.001）と学年要因（F〔2,176〕=3.12,p<.05）の主効果が有意であり，交互作用は有意ではなかった。多重比較の結果，Time2 と Time3 の得点は，それぞれ Time1 の得点よりも有意に高かった。また，第 1 回調査時の中学 2 年生群と 3 年生群の得点は 1 年生群よりも高かった（有意傾向）。

否定的認知・感情尺度得点では，交互作用が有意（F〔3.75,327.90〕=3.39,p<.05）であり，単純主効果の検定の結果，中学 1 年生群（Time1,Time2<Time3,p<.05）と 3 年生群（Time2<Time1,p<.05）に時点間の有意差が認められた。

養育スキル得点の分散分析に関しては，自尊心スキルを除いた尺度得点について，反復要因のみが有意であった。養育スキル全体の得点（F〔2,348〕=6.38,p<.01）では，Time3 が Time1 と Time2 よりも有意に低かった。また，道徳性スキル得点（F〔2,362〕=4.65,p<.05）と理解関心スキル得点（F〔2,362〕=12.40,p<.001）も同様に Time3 が Time1 と Time2 よりも有意に低かった。

以上の結果より，中学校 3 年間の間で，母親の子どもに対する子育て態度は，相対的に安定したものである一方で，子どもの成長に伴い得点が変化していることが示唆された。

続いて，クラスター分析を用いて，3 時点での得点変化のパターンを分析した。その結果，養育スキル全体の得点で見たところ，3 年間高得点群，3 年間平均値以下得点群，3 年間平均値以上群，3 年間低得点群の 4 群に分類することができた。この結果は養育スキルの程度については，安定性が高く得点の個人差が 2 年間の間でも一貫して継続していることを示唆している。さらに，この養育スキルの得点パターンと自尊感情との関連を分散分析によって検討したところ，3 年間高得点群は，3 年間平均値以下得点群と 3 年間低得点群よりも有意に自尊感情得点が高く，また，3 年間平均値以上得点群は 3 年間低得点群よりも有意に自尊感情得点が高かった。これらの結果より，母親の自尊感情の高さが養育スキルに影響を及ぼしている可能性が示唆された。

子どもの成長に対する認知・感情尺度得点の変化パターンに関する分析については，Time 1 と Time2 の 2 時点の変化のみ分析を行った。クラスター分析の結果，肯定的認知・感情尺度得点と否定的認知・感情尺度得点のそれぞれで，4 つの異なるグループが抽出された。肯定的認知・感情尺度得点では，2 時点で一貫して得点が高い高得点群，一貫して得点が低い低得点群，一貫して中程度の中得点群，そして，Time2 で得点が低下している得点低下群の 4 つが得られた。また，否定的認知・感情尺度得点では，2 時点で一貫して得点が高い高得点群，一貫して得点が低い低得点群，一貫して中程度の中得点群，そして，Time2 で得点が低下している得点低下群の 4 つが得られた。以上のように，養育スキルが比較的安定した特徴を示していたのに対して，子どもの成長に対する認知・感情は，安定した子育て態度である一方で，一部の母親にとっては，何らかの理由で，変動しやすい側面であることが示唆された。今後は，このような子どもに対する認知と感情の変動がどのような要因に規定されているのかについて明らかにしていくことが課題である。

②子育て態度と子どもの適応を媒介する変数としての相互信頼感

母親の子育て態度が子どもの相互信頼感を媒介し，子どもの心理的適応感に影響を与えているという仮説的な因果モデルを検証するために，子どもの報告する自尊感情と不適応感を基準変数，子どもの相互信頼感を媒介変数（説明変数），母親の報告する養育スキルを説明変数とする階層的重回帰分析を行った。データは第 2 回実施時のデータを使用した。

男女別に分析を行った結果，男子では母親が報告する理解関心スキルから子どもの報告する相互信頼感へのパス係数（標準偏回帰係数）が.47(p<.001)で有意であり，子どもの相互信頼感から自尊感情へのパス係数は，.39(p<.001)，不適応感へのパス係数は，-.29(p<.01)で有意であった。母親の報告する養育スキルの下位尺度得点から子どもの報告する自尊感情と不適応感への直接的なパスはいずれも有意ではなかった。

続いて女子では，母親が報告する自尊心スキルから子どもの報告する相互信頼感へのパス係数（.21,p<.05）と理解関心スキルから相互信頼感へのパス係数（.31,p<.01）が有意であり，相互信頼感から不適応感へのパス係数（-.38,p<.001）が有意であった。また，母親が報告する自尊心スキルから子どもが報告する自尊感情への直接的なパスも有意（.22,p<.05）であった。

以上の結果から，男女差が若干認められるものの，男女ともに子どもの相互信頼感は養育スキルの影響を受け，媒介する要因として自尊感情や不適応感に影響を及ぼしている可能性が示唆された。

また，3時点での縦断データを用いて，この仮説モデルの検証を試みたところ，母親が報告する理解関心スキルは，第2回調査時の子どもの報告する相互信頼感とも有意に関連し，第2回調査時の子どもの相互信頼感は第3回調査時の子どもの自尊感情や不適応感とも有意に関連するという結果が得られている。

以上の結果より，養育スキルのうち特に理解関心スキルや子どもの相互信頼感は思春期の子どもの心理的適応において重要な要因であることが明らかになった。

(2)研究Ⅱ

事後アンケートの結果，「子育てをする上での参考になった（平均4.49,標準偏差.51)」，「他の保護者の考えが聞けてよかった（平均4.45,標準偏差.60)」といった「知識の獲得」を表す質問項目の平均値が高く，次いで，「子どもに対する自分の態度の特徴がよくわかった（平均4.32,標準偏差.66)」，「子どもの気持ちについて考える機会になった（平均4.30,標準偏差.61)」，「自分のことについて新たな気づきがあった（平均4.27,標準偏差.82)」といった「自己理解」を表す質問項目の平均値が高かった。そのほか，「また参加したいと思った（平均4.25,標準偏差.67)」，「おもしろかった（平均4.18,標準偏差.68)」という「肯定的な感情と動機づけ」を表す質問項目の平均値も高かった。他方，「いらいらしてきた（平均1.18,標準偏差.39)」，「つらい気持ちになった（平均1.68,標準偏差.92)」，「落ち込んだ（平均2.22,標準偏差.1.21)」という研修会に対する「否定的な感情」を表す質問項目では，平均値は低い傾向が認められた。また，「子育ての悩みが解消された（平均3.10,標準偏差.90)」，自 信が持てた（平均3.13,標準偏差.72)」などは平均値があまり高くなかった。

以上の結果より，本研究において開発された子育て支援プログラムに対して，参加者は概ね肯定的な評価をしており，特に目標としていた自己理解の点では参加者にとって有益なものになったと考えられる。また，全体としてはプログラム参加によるリスクはそれほど大きくないことが窺われた。しかし，子育ての悩みの解消や自信の獲得という点であまり寄与できていない可能性も示唆された。

今後の課題としては，PATの使用の仕方を工夫することにより，さらに多面的な自己理解を深めることを可能にすること，他の異なる複数のプログラムを組み合わせる必要性，参加者のエンパワーメントにつながる情緒面でのサポート，参加者数を増やすためのアクセシビリティの問題，リスク評価と効果測定の方法の再検討，研修会後のフォローと個別対応の必要性などが検討された。

別表　PATの尺度項目の例

子どもの成長に対する認知・感情尺度
- 肯定的認知・感情
  - ・積極性が見られるようになってきており，成長したと感じる。
  - ・ひとりで行動できることが多くなってきて頼もしく感じる。
- 否定的認知・感情
  - ・子どもは保護者に対して隠し事が多くなってきており心配になる。
  - ・子どものことで把握できていないことが多く，不安を感じる。

思春期の子育て態度尺度
- 不安定な態度
  - ・子どもに対してどのように接すれば良いのか分からない。
  - ・子どもの考えが分からず戸惑う。
- 威厳ある態度
  - ・これだけは許さないということを必ず伝えている。
  - ・やってはいけないことには厳しく対応している。
- 適切な心理的境界
  - ・子どもの言いたがらないことは興味本位で聞き出さない。
  - ・子どもが保護者に見て欲しくないものは隠れてみない。
- 主体性の尊重
  - ・まずは子どもの話に耳を傾けている。
  - ・子どもの考えを引き出すように心がけている。

養育スキル尺度
- 道徳性スキル
  - ・子どもに社会のルールを守るように言っている。
  - ・子どもに責任をもって行動するように言っている。
- 自尊心スキル
  - ・子どもにあやまるべきところは素直に謝っている。
  - ・他の子どもと比較して話をしないように気をつけている。
- 理解関心スキル
  - ・子どもに学校であったことなど一日の出来事を聞いている。
  - ・子どもに話しかけ，意見や感想を聞いている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①渡邉賢二・平石賢二・信太寿理　母親の養育スキルと子どもの母子相互信頼感，心理的適応との関連　家族心理学研究　査読有　第23巻　2009年（印刷中）

②渡邉賢二・平石賢二　中学生の母親の養育スキル尺度の作成　家族心理学研究　査読有　第21巻　2007年 106-117頁

〔学会発表〕（計７件）

①平石賢二・宮脇克実・渡邉賢二・佐藤有耕　思春期の親子関係と子育て支援　日本発達心理学会第20回大会発表論文集　2009年 77頁

②渡邉賢二・平石賢二　3 年間の縦断調査による母親の養育スキルの変容に関する研究　日本発達心理学会第 20 回大会発表論文集　2009年 141頁

③平石賢二・渡邉賢二　思春期の子どもの成長に対する母親の認知・感情に関する縦断的研究　日本発達心理学会第 20 回大会発表論文集　2009年　140頁

④渡邉賢二・平石賢二　The relationship among Japanese mothers' parenting skills toward early adolescents, adolescents' sense of mutual trust, and psychological adjustment. Poster presented at 20th Biennial Meeting of International Society for the Study of Behavioural Development. Wuerzburg, Germany. 2008年

⑤平石賢二・渡邉賢二・信太寿理　A longitudinal study on mothers' perception of their early adolescents' growth. Poster presented at 20th Biennial Meeting of International Society for the Study of Behavioural Development. Wuerzburg,Germany. 2009年

⑥信太寿理・平石賢二・渡邉賢二　Japanese mothers' perception of children's developmental changes and parenting skills in early adolescence. Paper presented at 12th Biennial Meeting of Society for Research on Adolescence, Boston:MA. 2008年

⑦渡邉賢二・平石賢二　中学生をもつ母親の養育スキルと子どもの心理的適応との関連－出生順位に焦点をあてて－　日本家族心理学会第24回発表論文集　2007年 50-51頁

〔図書〕計 2件）

①平石賢二（編著）　思春期・青年期のこころ―かかわりの中での発達―　北樹出版　2008年　54-73頁

②平石賢二　児童・思春期の母親と心理教育　松本真理子(編集)　現代のエスプリ 493　サイコエデュケーションシリーズ　子育てを支える心理教育とは何か－誕生から青年期まで　至文堂　2008年　116-125頁

６．研究組織

(1)研究代表者

平石　賢二（HIRAISHI KENJI）

名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授

研究者番号：80228767

(2)研究協力者

渡邉　賢二（WATANABE KENJI）

鈴鹿医療科学大学

准教授

研究者番号：50369568